



上映集団ハイロ代表 大房さん

新たな40年というと80歳です。そりゃ大変です。ヨレヨレですー。

でも敢えて未来を見据えようという心構えは大切です。

日々のことをこなしていると、ついちょっと先のことさえ見通せなくなっていくますかね。極端な例ですが、今の映像文化の状況を40年前、たとえ20年前でも予測した人はいないでしょう。

インターネットを使って誰でも作品を発表できる時代。そしてお小遣い程度の予算で劇場用映画の画質をもった映像が作れてしまう時代。

こんなことは予測不能でした。

しかし、ハイロが残っているのも予測不能だったかもしれないです。

ではこれからの40年はどうなるのでしょうか？

今や携帯ムービーで実験映画を作る人もいます。あと数年で、海外の作品をリアルタイムで上映なんてことができるかもしれないし、手のひらサイズの映写機でどこでも上映会なんてことになるかもしれません。

実験映像が大人気なんてこともあるかもしれないし、反対に映像なんて誰も見向きもしなくなるかもしれません。

そんな中でハイロはどう活動していけばいいのか。

映像と私たちの関係は、今後はますます映像が身近に手軽になっていきます。

誰もが簡単に映像を公開し、コンテンツフォルダーになる。

ハイロもそれを積極的にとらえ、より幅広い作り手に働きかけていきたいです。

だから新たな40年へ心構え、その1は「まだ見ぬ世界中の作家へ」呼びかける。です。

そして、過去の40年と同じなんですが

その2「作家と観客の自由な場」を維持する。

その3「映像をもっと実験的に」と問い続ける。

です。

これらは矛盾をはらんでいます。

幅広い人が集まる自由な場は、薄まったテレビのようにトンガリの無い表現しか生まないかもしれません。

でも、両方を満たすことで次世代の作家「碑文谷映像派」を育むことができるんじゃないかと思います。

今日のパッケージ

午後11時～

フリースペース

大房さん

ハイロの上映会は、誰のどんな作品でも上映する、上映後に作品について観客と共に語り合う、をテーマに生まれて続いてきた。

まず、『シネマフェスト』があった。観客と作者がもう少し深く語るためには、企画上映もしようということになった。その流れで生まれたのが、『フリースペース』。

「街を歩いていたら、映画を上映する空間があった、ちょっと寄ってみた。」とか、「フィルムを持っていたから、上映してみた。」というような、日常の感覚に近い上映会をやろうというテーマで1980年ごろから始まった。

80年代の後半は『フリースペース』だけで毎月開催していたこともある、いわば『シネマフェスト』に続く由緒あるコーナー。

言ってみればハイロの精神ここにありで、まな板に乗る覚悟のある者、来い来い。他で認められない変人、来い来い。まだ見ぬ作者、来い来い。なのだ。そして2009年の碑文谷。『フリースペース』は時間枠を60分から90分に拡大した

もう一度「作品を持ち寄って語り合おうよ」という原点から再スタートだ。

(応募は希望日の2週間前までに)

junofusa@kt.rim.or.jp または dodonga2-5-5@hotmail.co.jp

大房さん プロフィール

本名大房潤一（おおふさじゅんいち）。映像ディレクター／VJ／大学講師

80年代にビデオアートのことをはじめて以来、映像業界に居る。

90年頃よりハイロ代表になり細々とフリースペースを運営していたが、いろいろなメンバーが増えて活動も活発になったので今は事務局長的役割。会計や連絡係、Web運営などをやっています。



今月の参加作品

ピーマンの眼差し・サボテンの眼より「檸檬イエローエロス」柴田容子、鈴木沙耶 6分 DVD
黄色い綺麗な色の奏でるすっぱい感覚。鈴木沙耶とのHなメロディーの連弾。どう編集されて見えてくるのか。

『ガニ股番外地 予告編〜望郷篇』ほしのあきら 8ミリ 24分

1968年作品。今回からしばらく遺言シリーズをやろうと。これは自主映画処女作。元はダブル（レギュラー）8ミリ。メタ映画目指したけどごっこ映画になっちゃって、“映画みたいだ”と友人に言われ、違う！と思った・・・ハイロ結成前に渋谷ヘア（後のアピア）で上映してボロクソ・・・言ってみれば全ての原点、やるぞという決意・・・みたいなよね。だから、きっとロマンチック好き。

『赤い宇宙』小松美奈子 8ミリ 6分

私は植物になりたかった。魔女にも詩人にもなりたかった。彼は私を植物にも魔女にも詩人にもただの女にもしてくれる。彼は宇宙だ。赤い宇宙。嘘を、嘘で固めたら、もう一度彼に会えますか？

『はげて☆ドキドキ』室井夏海 8ミリ 6分

「あー・・・私なにしてんだろ。」という作品です。何がしたいのかよく分からない。地に足ついてない！ただ私がかわいいだけの映画です。あといっくん（いっくんは1歳のオス猫です）。

『マッド前線』裸足のマヤ DV 9分

例えば原宿なんかを素っ裸で走ろうが、誰の記憶にも残るコトもないんだろう。私が走るんはきっと、自分にアシートを遺したいからやと思うんや。地球をエグるように大地をケズり取るように！アナタのワタシのド真ん中を走り抜きたい！！

『子どもが虫の死骸を埋めにいく』葉山嶺 8ミリ転写 10分

「何も生まれていない場所」へ戻ってって（わすれてください。もう同じことは二度と起こらない）、何度でも繰り返す。「戻すこと」は限界の無い行為。消えるために在り、発見されるために在る。跡を残さない（今、わたしは何も知らないフリをした）まま、落下した身体と飛行機が始まりへ戻れないとして（今、わたしは何も知らないフリをした）も、ここから戻されるのは、必然的にそれとそっくりの光（闇によって発見される光か、その逆）になる。

*転写=他から写し取ること

『これから恋人へ東京の青 を贈る』川本直人 DVD 15分

これから を始めて、早や一年。いつもレンズと向き合った。僕はここからカメラを握ろう。浮き輪よ浮き輪。どうか迷わず行ってくれ。お前に見いだし、お前の道に見いだそう。

『缶』須藤彰 DVD 9分

8ミリを初めて回したのは中学2年の冬です。写っているのか半信半疑でしたが、上がったフィルムには確かに窓から見た雪がありました。純粹に嬉しくて感動したのを覚えています。

あなたが証人

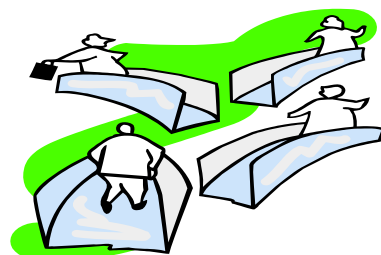


明日の作家になる・・・かも知れない。



午前1時15分～

出張クラブ マエダシゲル



学校で学んだ方法も、積み重ねた経験も、それでは映画が作れない。それなら、そんな未練はなんとか捨てて、齢四十七で、つかみかけた、今の私の映画は、体力、気力、集中力のでたとこ勝負。時を選んでもる余裕はない。場所を選んでもる暇はない。

カメラがあって時間がある。何故かそのときそこにいる。それが、私の撮影チャンス。シナリオはない。仕事の向くまま西東、子守りをしながらカメラをまわす。その時だけは未練を捨てる。人にいわれて気がついた。これが、私の映画だと。その先に待っていたのは、普遍的な日常映画。それが、出張クラブです。真夜中の8ミリ映画と撮影風景ビデオの二本立て。

今回の撮影場所：猿島、門司港の駐車場、津久井の保育園、箱根の林、船の上

マエダシゲル・プロフィール

本名前田茂（まえだしげる）：スーパー8の出張映像作家。

鹿児島から就職上京した両親から生まれた一人っ子。六角橋で生まれ、桜木町、立川、大倉山、熊谷、溝ノ口、巣鴨、板橋、西日暮里と移り住んで、南大沢に落ち着く。堀越高等学園卒業（縁はないけど、同期に蒲池紀子、宮脇康之、野村潤一郎）東京映像芸術学院卒業が同時通訳オペレーター。長距離運転出張の三児の父。ハイロの映写技術。「浅草任侠クラブ」会長、最近、娘と「つけものクラブ」を結成。短期目標は、そくせき漬けのバリエーションを増やす、長期目標はぬかづけ。

午前2時15分～

心動交差点～あわせる気持ち～

ビデオ使い 木村和代

心動交差点とはゲスト作家と木村和代が作品と言葉を交わすことで、会場に波を起し、ゲストとこの時間「観客」である会場の人々の心を動かすコーナーです。

映像は、ほんとは目に見えない。
映像は、ほんとは手で掴めない。
閉じ込められた時間の塊を＜映像作品＞と呼んでいる。

閉じ込められた過去の時間を、現在に解き放つ。
上映することで、時間が時間に作られる。

時間ということに、想う私、木村和代が作り出す時間。
時間ということに、想う時間。

心動交差点は、この会場の心の動きが交わる時間。
過去の想いも、未来への想いも、
作り手の想いも、観客の想いも、
波となって交差する。

波の先が、また波として発生するように。
この時間は交差するところから始まります。

今回のゲストはフィルムメーカー：川口肇さん。

川口肇さんが起こす時間の波と、木村和代が起こす時間の波。
心の動きは波の振動。

時間をテーマに今回は波を起こします。

川口肇作品
別紙で配布予定

木村和代作品 「apollo11」 2009.7 新作

ビデオ使い木村和代 プロフィール
本名木村和代 (きむらかずよ)。ビデオグラファー／映像使い
撮影しているとビデオカメラと会話ができます。編集して
ると素材の時間が語りかけてきます。それがわかるそんな映像使いで
す。予言のように言葉が降ってきます。それでビジュアルシャーマンな
のかなあと。予知はできません。
映像は奏であるのだと想う。音楽に作曲、編曲という分類があるのと同じように
映像の作映像、編映像を行う。ビデオカメラの録画時に静かに聴こえるモーター音が、
呼吸と血流のリズムに合わせやすいので作品はビデオ作品。編集している時はオーケス
トラの指揮者になった感じがする。映像を身体に入れると内面から見える世界があつて
...ときどき シャーマン化する。



午前3時00分～

Dimension Trip (dub)

選ばれし神の子 なごみ

昨年とは少しラインを変え、宮崎が既に完成された映像（劇映画、映像作品（ハイロで上映された作品も含む））を再撮影し、新たに作品にするコーナーです！

未知なる世界へ続く異次元トリップに、あなたを誘います。

(お相手 スナミマコト、yoo)

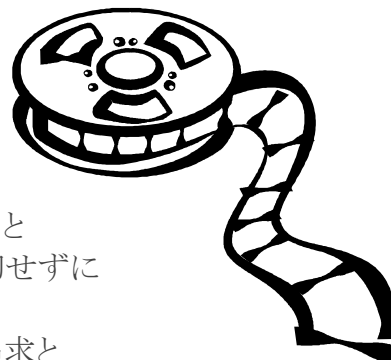
選ばれし神の子 なごみ プロフィール
本名宮崎和海 (みやざきなごみ)。1982年生まれ。東京映像芸術学院卒業後、充電期間を経てハイロにほぼ毎回出品するようになり、昨年夏よりハイロメンバー入り。特技はレシピを見ずに冷蔵庫に有る物で夕食を作る。弱点は欲望に結構負ける。意外と負けず嫌いだけど新垣ゆいにはいつも負ける。
GHOSTYARDと言うギターデュオで活動中。2nd EPが円盤、サンレインレコードで発売中です。よろしければお願い致します。

http://www.enban.org/shop/cart_pro.cgi?page_id=1&disp=on&mode=search&q=ghostyard

<http://www.sunrain-records.com/catalog-2187.html>

<http://profile.myspace.com/index.cfm?fuseaction=user.viewprofile&friendid=1000514335>

午前3時45分ー
鈴木研究所
鈴木所長



“鈴木研究所”とは、グラフィック・デザイナー鈴木宏忠(40)と“売れない漫画家”スナミマコトがカメラを使わず、撮影一切せずに8ミリ及び16ミリのフィルムに直接削ったり、塗ったり、切ったり穴をあけたり、など様々な手法を用いて、表現の追求とその探究の効果や手法をプレゼン形式で発表するコーナー。そこにあるのは、技の巧みか？哲学か？フィルムの美しさや奥の深さなどが少しでも伝えていく事が出来ればと、思います。8年目突入です。(お相手 ほしのあきら)

鈴木所長 プロフィール

本名鈴木宏忠(すずきひろただ)。アート・ディレクター/グラフィック・デザイナー。日夜仕事に追われるも、10年前にハイロに観客として常連となり、ほしのあきら「30歳で作ってる人はやめないよ。」の勇氣ある一言で再び映像制作をはじめ。実際その通りである。東京都北区のおふろ屋(現在は駐車場)に長男として生れる。美大をめざすも浪人中に映画にハマってしまい“東京映像芸術学院”卒業。が、デザイン・広告に熱烈に興味をいただき、グラフィック・デザイナーとなり19年たつ。ハイロには98年に入団。ハイロのチラシデザイン担当。鈴木研究所所長。最近、ワンコを飼いだしました。

フィルムピクニック
スナミマコト

フィルムピクニックはお客さんに16ミリフィルムを渡して、何かやってもらうコーナーです。何かやるのはど根性です。男なら、やってみなです。女なら、肝っ玉母さんです。今回から鈴木研究所の中でやる事になりました。鈴木所長と共にフィルムへの考察を深めるため、いろんな作品待ってます。フィルムに触れる魅力をぜひ共有してみませんか？前回フィルムを貰った人は、上映前に持って来て下さい！(お相手 鈴木所長)

スナミマコト プロフィール

本名角南誠(すなみまこと)。1982年生8月15日まれ。岡山県出身。絵を描くのが好きだったが、デビッド・リンチを見て映画を作りたくなる。しかし大学に入って実験映画というものを知り、お金が無くても映画を作る方法を考えるようになる。そして始めたのが、カメラを使わず映画を作る方法。でも奥の深さにびっくりするやら、巨匠はいるはで、毎回あたふたしています。因みに漫画も描いています。北冬書房より「幻燈」発売中です。



ピーマンの眼差し・サボテンの眼

YOO

すみません！！コーナー担当者の怪我と準備不足で、
次回スタートとなります。
今までに無いものを目指しますので、どうぞご期待下さい。

YOO プロフィール

本名柴田容子（しばたようこ）。YOOカンパニー代表。100年の不況。社員一人の自転車操業でも少しでもいただけるお仕事は大事にやり遂げます。おやじ扱いの家族からのほじけものですが、家族の協力があってこそその母を連日頑張っています。



ハイロはこのように、メンバーそれぞれが映画について考えることを形にして提示します。そのパッケージに個性と魅力があるか、話し合いを繰り返しています。興味のある方はメンバーになって自分のコーナーを作して下さい。パッケージについての不満、励まし、意見などあれば、どうぞフリースペース欄にあるメールでお願いします。

あなたが証人



明日の作家になる・・・かも知れない。

アピアは1970年、スペース・ラボラトリー・ヘアーとして生まれ、舞踏・演劇・映画・パフォーマンス・その他多くの表現の実験工房として、アンダーグラウンド文化を育てて来ました。近隣からの苦情や内容に対する体制の抑圧に抵抗しながら、経済的な圧迫から仕出し弁当やパーティ会場としての別の顔を持った時期も経て、丸39年。ずっと〈これからの表現者〉に目を向けた場であり続けています。
新たな地・碑文谷での再開は抗い続けるアピアの展開と発展でもあります。
寄生虫ハイロも同様であらねばなりません。よろしくお見守り下さい。

うじうじ物語

神山昇



1) 記憶のはしはしと アピアの出現。

学校のクラスで漫画を描いて、みんなに喜ばれたからといって、それを一般雑誌に投稿しても掲載されることはまず無い。しかし、自主出版という同人誌を出し、自分たちで発表し合うことは、才能が無くても、へた糞でもできる。1964年、もうじき中学も終わる頃だった。月刊「少年」という漫画雑誌で同人誌発行を呼びかけたら、あっという間に5、6名が全国から集まった。へたでも何でも自分で書いた漫画を一冊に集めて発行し、自分たちで回覧することで満喫できる。しかし、3号目を出す頃、移り気で目先の快楽を優先する僕は、一コマ、一コマ面倒な漫画を描くより、その同人誌をまとめるという役目に夢中になっていた。呼びかけたのは僕だから当然編集長でもある。自分の好き勝手に雑誌という世界が創れることでは楽しかった。

だが長続きはしない。ある日、隣町で大がかりな映画のロケーション撮影に出会った。映画づくりに目覚めてしまった。黙々と机に向かって一人漫画を描く姿より、大勢の羨望の眼差しに囲まれて撮影する世界、映画スターを思い通りに演じさせる映画監督の方がよっぽど格好いい。

志の無い僕は万事がこうだ。

映画の専門学校に行きたいと甘える次男坊は、当然だが一括された。家業に何の役にも立たないし、テレビのすごい普及の下、既に斜陽と呼ばれている業界である。本当はどうかかわらなかったが一般的にそこに働くスタッフは貧困であるというイメージもあった。

話し合う余地など無かった。家業に何ら役に立たぬなら大学は無用である。ところがインテリアデザイン学科と一緒に、映画学科がある大学があった。インテリアは家業の建具屋にとって役立つ。うまくごまかせると踏んだ。

1966年。あいかわらずいやがる同級生を役者に仕立てて、映画ごっこを8mmフィルムで楽しんでいたら、平穩な大学が突然、騒がしくなった。

精神的に幼い僕は、警官とは正義の味方と信じていたが同じ大学の学生が逮捕されたことで一変。遅れてきた反抗期も手伝って僕の学園紛争が始まった。

右翼や体育系の同級生にびくびくしていたある日、映画科の連中が自主上映を始めた。足立正生の「鎖陰」、ヤン・ニエメツの「夜のダイヤモンド」、フェデリコ・フェリーにの「8 1/2」だ。世の中にはこんな「映画」がある。

強烈なカルチャーショックを受けた。

その後、紛争はあっけなく収拾。居場所が無くなった僕は、大学に残るか、ドロップアウトするかに迫られた。勉強嫌いは、悩まずに後者を選んだ。

「誰のおかげで大学行かしてもらったんだ！勝手にやめやがって！」

この当然の事態に家には帰れず、同じ高校の美術部長だった伊東哲男（後に渋谷アピアのマスター）や文芸部長だった宮崎聡の家に上がり込んで、難を逃れていた。そして、彼らが夜通しの自分たちの文学論や美術論を戦わせていた隣で、その雰囲気気持ちよく浸っていた…

その頃、学友の一人だった牧井優なるネットワークの達人に紹介されたのが、同じ大学をドロップアウトしてい

た写真家志望の高島史於（ハイロ設立メンバー）だった。

伊東哲男、宮崎聡、高島史於との出会いで意気投合した。

知人を介しては詩集の自費出版、モダンダンスの美術、前衛演劇や暗黒舞踏へと片っ端から参加させてもらった。

それらの動きの中で片岡輝というNHKの放送作家と出会う。

東由多加率いる東京キッドブラザースが、渋谷の小劇場「ヘアー」を譲るといふ。

「渋谷ヘアー」なる小劇場は、アメリカで大ブレイクしていたロックミュージカル「ヘアー」を日本版で公演。その有志が運営していた。あるいは、デザイン専門学校のパンタンが教室として使っていたとか。記憶はあいまいだが、その劇場を一緒に運営しないかと提案された。

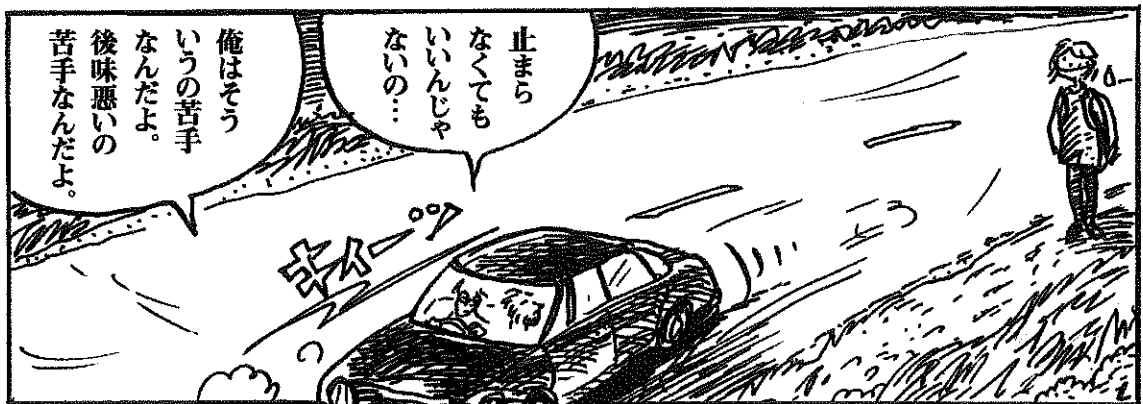
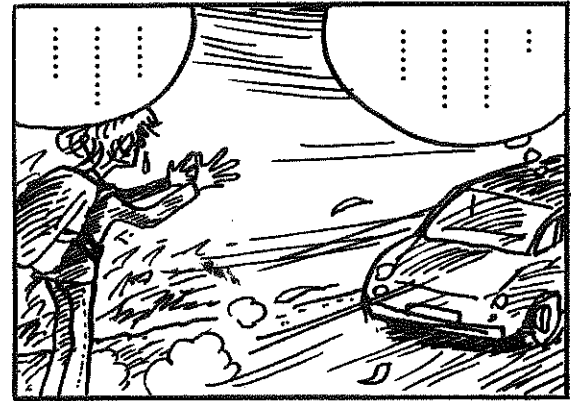
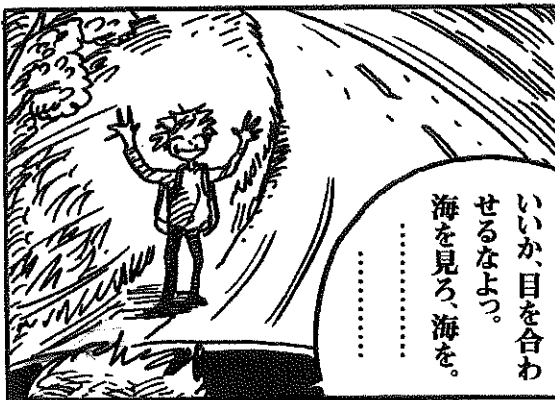
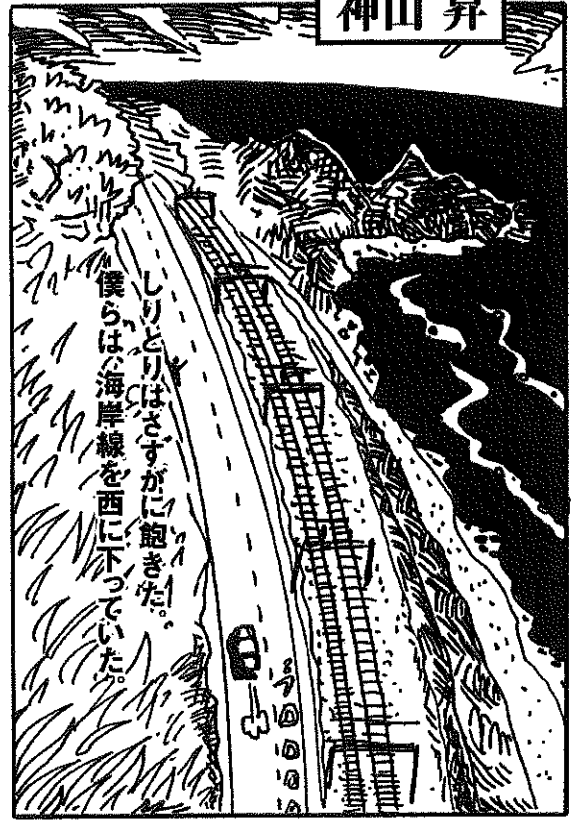
僕らは驚喜した。

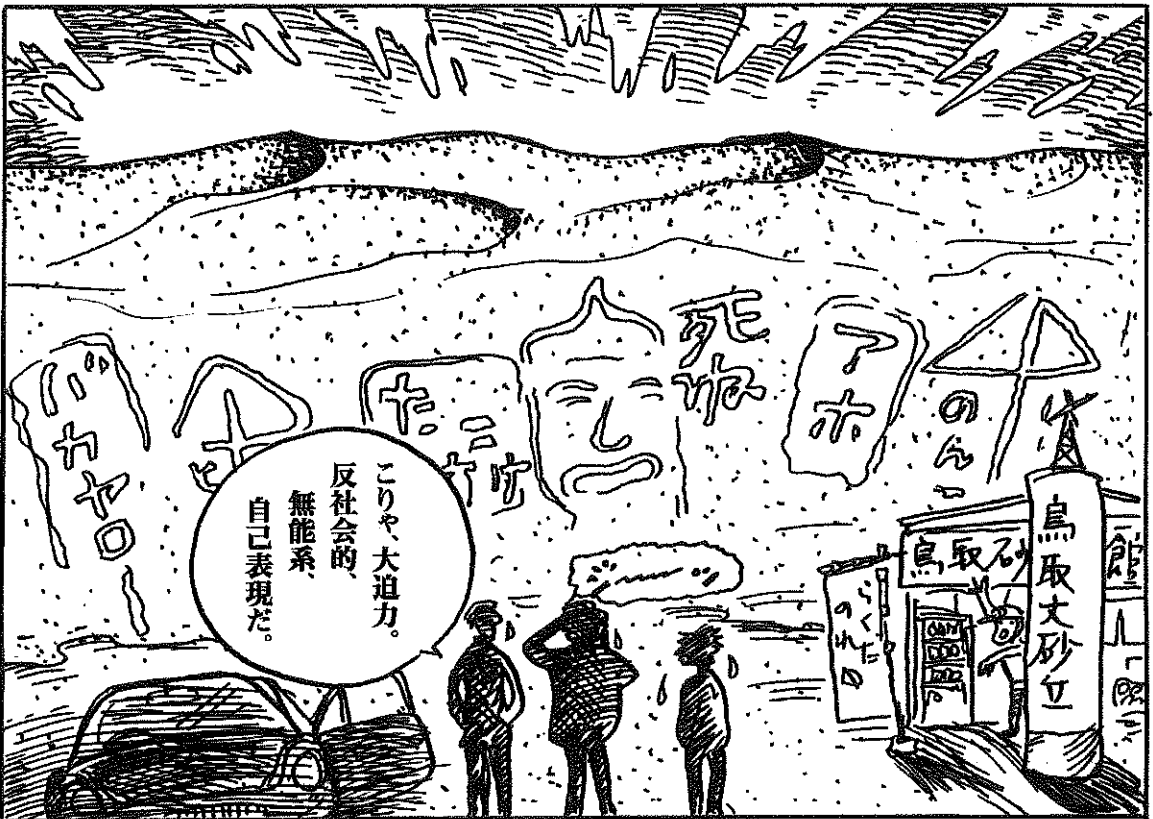
その日暮らしの僕らにとってまたとないチャンスだった。自分たちでアンダーグラウンド文化に携われ、しかも多少の生活費が稼げる。当時といえば、唐十郎率いる状況劇場、寺山修司率いる天井桟敷が闊歩していた時代である。その末端にいられるのだ。

しかし、当然譲渡資金がいる。百万某を集めなければならない。僕の兄で家業の跡取りは、アングラにはまったく無縁だったが50万円の大金を出してくれた。儲かると騙したのだが。

そして、数名の有志の資金で劇場は、「渋谷スペース・ラボラトリー・ヘア」と名を変え、演劇やダンスだけでなく現代アートにも役割を果たしていた。

神山昇





アピアとハイロに寄せて

小池和巳

渋谷アピアへは1984年の夏頃から通った。月1回ほどのハイロ・フリースペースは、無差別・無審査。多様な作品が集まり毎回刺激的だった。「1回で終わりの人」もいれば、「常連となる作り手」もいた。私などは作品参加することは稀だったが、多くの作品との出会いは貴重で、今思えば、ずいぶん贅沢な時間を過ごしていたことになる。山崎敏男、山崎幹夫、大川戸洋介、園子温、井口昇といった作家達の名前が思い浮かぶ。もちろん、盟友西沢正智の名前も忘れていない。その他にも、多くの作品や作者に出会っているはずだが、多くは失念しているうえ、上映資料も散逸してしまった。だが、その当時、目蓋に焼き付けた映像の記憶は、何かの折りにふと顔を覗かせることがある。ハイロとともに、紫煙の漂うアピアの薄暗がりは今でも、私の中にある。

さて、この小冊子の原稿依頼を受けたとき、ほしのあきらさんが、「最近の若い人に向けてでも、何でもいいから書いてくれ」とおっしゃった後で、「結局は、自分に向けて（書くの）だな」と独りごちた言葉が胸の奥に引っかかっている。長い期間、作品をまとめられないままにいる自分に向けて、今、私が言えることは何だろう。さしあたっては、渋谷アピアへの、ハイロの企画参加ということであるからには、6月14日（日）に上映された作品について、以下簡単に記すことから始めよう。

鈴木さんの作品は、水墨画を思わせる発色の、文字どおりの「手づくり映画」（8mm・短編）。なんと線香でフィルムに加工するという限りなくアナログタッチな（という言い方があるかどうか分からないが）映画。不規則な円形の律

動と、白黒の明滅が観る者の眼を楽しませる。

角南さんの作品もカメラを使わずに制作され、「手づくり」という点では鈴木作品と共通する。加山雄三の曲（「君といつまでも」！）をバックに「海」という文字が一画ずつ筆順に従って現れ、やがてそれが爆発的に複数化し、大反乱をおこす。踊る文字達による「アクション映画」（16mm・短編）だ。

木村さんの短編はこの日のための最新作。私には普段見慣れないデジタルフォーマットの作品のせいも、もうひとつ「作品」の気分に乗れない。このフォーマットゆえの抵抗が、まだ私の中にあるらしい。

ほしのさんの「Have a nice day」は、はるか以前にハイロ・フリースペースで一度だけ観たことがある。再見して改めて、作者が何を見つめていたかがよく分かる。

時間的な制約もあり、この日はこの4作品だけの上映だったが、ひさしぶりのハイロは懐かしさ以上に、変わらない何かを感じることができた気がする。それは渋谷アピアとともにあったハイロの「歴史」かもしれないし、「自分の手で映画を作る」ことへの「意志」の強さかもしれない。

かつて、映画を作ろうとする（あるいは表現に向かう）混沌とした「意志」だけが、私をカメラに向かわせた。カメラは、その切実な思いゆえに、私自身に向けられた。「Relations」（1984・8mm）「いつか映画になる日まで」（1986～87・8mm）という私の作品は、そうやって生まれた。そして、映画の自意識過剰から抜け出せないまま、今再び、作品に、カメラに、あえて向かうとすれば、私は何から始めればいいのか。

そんな疑問を考えめぐねているうちに、私は、ある思いに辿りつく。

「私の中にもう答えはあるじゃない

か……。安易なシャッターの切り方を批判されることもあるだろう。対象に流されてカメラが揺らぐことを戒めつつ、それでもやはりカメラから手を離さずにいること。とにかく、カメラを手にする事だ。」

日常に隠れた、まだ見ぬ「光」と、「自分」の知らない自分を発見するために、カメラを廻し続けよう。そうやって撮影されたフィルムに「私」をどう滲ませるかを考えよう。手持ちカメラの緩やかな動き。マニュアル操作で微妙に絞り込まれた露出。ともすれば埋没してしまう日常の中に、カメラがあることで自らの周辺や記憶がフィルムに定着されるとき、技術への反映として「自分」が写し込まれる。やがてそれは、自分が生きることの証しとしての「映画」になる。

「自己の存在証明」としての映画には、限界があるとも言われる。また、観る者のみならず、作者も映画を固定してしまい、それを広がりのあるものとして捉えることができなくなるとのことも。だが、「今、自分が作る根拠」を考えるならば、作品は作者自身（とその心の在りか）と無縁であるはずがない。自己表現としての個人映画制作は、自分について考えることが出発点になるからだ。

個人が自由になるための方法の一つとして「映画する」こと（そう言えば「映画する」などという言い方が流行したことがあった……）。他では代えのきかない自分だけの映画。自分のための映画。私映画。作ることへの意志だけが、自分の映画を支える。

ハイロ・メンバーのマエダシゲルさんは、表現したいことや、そのスタイルへの自問自答を繰り返しながら、映画に向き合う。今回のアピア企画では映写技師として活躍した彼の存在は、そういう意味で貴重だ。

誰もが受身形で与えられた私たちの「生」を、能動的な意味あるものとしていくために、私の映画もやっと長い眠りから目覚めようとしている。

009/07/05 記

筆者プロフィール

こいけ かずみ :

1962年埼玉県生まれ。高校教員。8mmカメラはフジZ450、キャノン1014XL-Sを愛用。

大学在学中からアピアに顔を出しはじめ、主に観客としてハイロを見続けてきた。1985～86年頃には、大学の映画サークルで活動をともした西沢正智氏（『北新宿の切れた指先』（1986）・PFF87入選）とともに常連となる。

PFF`85では『Relations』（1984・8mm）が、ほしのあきら氏により「素直な手触り」と評された。また、五日市映画祭（のちに「あきる野映画祭」）（1989）では『いつか映画になる日まで』（1986～87・8mm）が撮影賞を受賞。自分にカメラを向けながら日常を記録するスタイルの作品が多い。ほかに『椿の一枝髪にそえ』（1985・8mm）、『ぷらちなの手』（1989・8mm）などの作品がある。

特集 5月15日から 今までに見た映画で心 に残ったのはこれだ！

SF 映画はどこへゆく 鈴木宏忠

「トランスフォーマー／リベンジ」を観る。2時間30分間、ロボット達がもの凄いスピードで複雑にガチャガチャ変形して戦いまくる映画である。

ふんだんに費用と時間をかけて職人に作り込ませたCGは映画館で鑑賞しないと、その良さは伝わらないと思う。しかも、変形やディテールが凝り過ぎていて、どっちが敵か味方かがわからない。ガチャガチャ変形（トランスフォーム）して戦いまくる映像のクオリティが高すぎて、そのガチャガチャ変形とバトルで2時間30分その行き過ぎたCG一点で押し切ってしまう。

話しは、エロい彼女とよくしゃべる大学生が走りまわるだけのハリウッド映画にありがちな展開でひねりとかは無い。こういう映画を作ってみようとする方々は並大抵アホさではないと思う。製作陣はバカを通り越して大馬鹿者である。とにかくCGにかける意気込みたるやここまでやられると、ただただ脱帽である。バトルもビームとか出ないので、とてもプロレス的で好感がもてる。

変形シーンに、もっとロボットそれぞれの個性が出ていたり、人間が乗って操縦するわけではないので、武器の形とかどうなっているのか全くわからな

いし、ロボットの台詞もどいつがしゃべっているのかわからないのも難点だし、目まぐるしくて疲れる。でも、この映画はアリだと思う。とにかく押し寄せ押し切っている力は、もはや技術と言うよりは、CGへの執着の勝利だと思う。

ただ、なにかこうマインドとか感情とか置いて来てしまっているのも感じる。

今後CGのこのクオリティが「トランスフォーマー」が基準となってしまうのだろうか。中身の薄っぺらさをCGで押し切るだけの作品が増えて行きそうな気がしてならないが。。

気をつけなければ行けないのは、技を磨くことは、単純に技術が向上するだけでは駄目なのだと理解しているかどうかである。木をみて森をみずじゃないけれど、こういう事は自分自身にもあてはまるし、ちゃんと足元見なければと思う。

高校生の時に「エイリアン2」を観た時の衝撃や興奮にくらべたら、ずいぶん低い事は確かである。あの時の興奮やワクワクはもう味わえないのだろうか。ちょっと寂しい感じですが、自分自身にもあてはまるし、ちゃんと足元見なければと思う。

高校生の時に「エイリアン2」を観た時の衝撃や興奮にくらべたら、ずいぶん低い事は確かである。あの

時の興奮やワクワクはもう味わえないのだろうか。ちょっと寂しい感じです。

透明な硝子の器で五感で

柴田容子

5月の終わりにAmazonで、フェリーニの『女の都』と『魂のジュリエッタ』のDVD二枚を買った。『女の都』と『魂のジュリエッタ』は靖国神社側のイタリア文化センターで二回見た。解ったような、解らないような独りよがりの解釈なのにやたら面白く、感動してしまった。『魂のジュリエッタ』は小学校2年生の時に、海外を長期に転々と出張していた父の久しぶりの帰国の日、商社マンの父と教師の母との、夫婦喧嘩の最中にテレビで見た。ジュリエッタが母でその夫が父というように、照らし合わせて見ている自分がいた。子供なのに、妙に男と女を意識した。その後、次の週が『女の都』と続いた。父を描いて見てしまった。その時からヨーロッパの匂いと感覚が私は好きだと感じた。

イタリア文化センターに通うようになってから、フェリーニの作品を全部見ることができた。さらに、数回のリクエストがかなって『女の都』と『魂のジュリエッタ』を見ることが出来た。イタリア語は軽快に流れて小気味良く聞こえるのに、字幕の英語は、とてもややこしくて、文字数が多いのに、英語特有の簡潔さがあって、映画とはかなかけ離れているように感じて字幕な

んていなかった。画面の美しい独特の色彩や景色や広さが素晴らしくて、映画の粒子が静かに注ぐ幻想に、沢山浴びられる自分が嬉しくてならなかった。フェリーニの描く男と女が小気味良くやり取りして人の幸せが何なのか、大事な思い出は何なのかが心に残る。DVDを購入して、友人に貸して、また再度二人で見た。カットカットで感じた事を語り合った。言いたい放題感じた事を言うとなぜか答えが別れなかった。誰が見ても、どこで見ても、映画館でもDVDで見てもぶれない感性が伝わる映画だった。答えは1つでは無いけれど、演出家の言いたいメッセージが直に伝わってくる。

ドイツの映画作家ウテさんの小作品の上映会が早稲田大学の大隈講堂であった。物凄く感性が動く感じる素晴らしい作品ばかりだった。大人になっても濁らない感性が素直に私の何かをくすぐった。お日様の動きやお月様の臭いがした。平凡な日常の中に、親子の愛や年輪、子供達の笑いや作家の淋しい時間も見えた。映画を通して教えられる感性のシャワーは、心が弱った時だけでなく、何時でも透明な硝子の器で、色々色彩を五感で感じたい。

人情紙風船をみた6月

スナミマコト

この6月に、ラピュタ阿佐ヶ谷で山中貞雄の特集があった。現存する3本の作品を初めて、しかもいっぺんに（一週間ごとに一作品ずつ）、映画館で観られた。それぞれの作品について取り上げたいけど、その内の一つ、「人情紙風船」を取り上げたい。

まず、6月は僕自身、本当にお金が無かったので（いつも無いけど、それよりも無かった！）、映画を見るお金を確保するのが大変だった。現に、「人情紙風船」を観た日は、倉庫のある川崎まで、雨が降っても自転車で行き、夕方に仕事が終わって、川崎から阿佐ヶ谷まで自転車という、バカしかやらない移動法で、お金を浮かし、それでも足らなくて、本を売ってようやくお金を作って観たのだから、バカよりさらにバカである。だから「人情紙風船」は本当にツライ映画だった。染み込んでくるといふより、ざんざん降りの雨の中に突っ立っている、浪人の海野又十郎の様だった。あれは僕だ、と本当に思った…。

今「映画監督 山中貞雄」という本を読んでいる。著者は山中貞雄の実の甥である、映画監督の加藤泰。この本が面白いのは、加藤泰の語る様な文章から想像されてくる様々な人物や、山中貞雄の姿、と、語る加藤泰本人が浮かび上がってくる所だ（この本の原稿を書き終えた5ヶ月後、加藤泰は亡くなっていて、ほぼ最後の仕事らしい。愛情と尊敬のこもった目線で当時の山中貞雄や日本映画界を丁寧に描いていて、最近復刊したので、今も手に入る本で

す。）。この本の「人情紙風船」について書かれている所によると、脚本の三村伸太郎が上げたシナリオでは、三村流のロマンチックな時代劇というものだったらしい。それを山中自身が直したのが映画になっている「人情紙風船」らしい。本には三村伸太郎の「人情紙風船」を観た感想もある。

「私は、あらためて、作家山中貞雄の内部を凝然と見つめたのである。」

「山中は、私のシナリオから彼の暗い厭世的なカゲを持った『人情紙風船』をつくり上げたのである。この傾向は、或いは山中の本質的のものではなかったであろうか。――（略）」

確かに、「人情紙風船」は暗い映画だ。けどこの映画が浮かび上がらせているものは心の深くに届いてくる。事実、公開時非常に多くの支持を得たらしい。大切なものが失われた時、人は大切なものの大きさに気付く。

山中貞雄が「上手い」映画監督だった事は映画を見ればわかる。精力的に多くのシナリオも書いている。ただ敢えて言うならば、一つ一つの作品をととても冷静にやっていたのではないだろうか。例えばマキノ雅弘の様に「粹」で作るのとはまるで別の、物事を俯瞰で見ている様な所があると思う。「人情紙風船」を『写実』でやるという事にこだわったのもそういう事だと思ふ。

「人情紙風船」の封切りの日、撮影所でみんなといた時、渡された電報が召



集令の知らせだったような。シナリオでのみ判る他の作品たち。「街の入墨者」や「森の石松」が観てみたいなあ。

旅行から帰る大事な時間

木村和代

月に何本も映画館で映画を観ます。レイトショーの時間帯に出かけることが多くなりました。早い時間に観た時は、続けて別の映画館に足を運ぶこともあります。

そんなわけで、映画のタイトルはほとんど忘れてしまうのですが、小さなm&mのチョコレートを入力で渡された『チョコレート・ファイター』は印象に残っています。日本ヤクザとタイ

のマフィアの女、その間に生まれた女の子・ゼン。彼女は自閉症で脳の発達が遅かったが、並外れた身体能力で病気の母親の治療代を回収したり、闘ったり。

その主演であるゼンが生まれるまでのストーリーが長い…。誰が主演か分からなくなった位でやっと赤ん坊が出てきたと思ったら、みるみる内に成長。少女となったゼンは、カラフルなマーブルチョコをガツガツ食べる。主食かと思うくらいチョコを食べるシーンが出てくる。嫉妬の塊マフィアのボスが執拗に追ってくる。流れ着いた住まいがキックボクシングジムの横にあるアパートで、ゼンは練習を眺めているうちに、自ら柱に素足で蹴りを入れ始める。当然血だらけ。母親は止めることもなく、柱に布団を巻いて、ゼンが思う存分蹴りを



入れられるようにした。テレビで格闘シーンを真剣にみたり、格闘ゲームにはまったり。ゼンはコツコツ闘う術を身につけてゆく。この流れで後半はとにかくアクション、アクション、アクション。

アクションシーンお決まりのリプレイ、スロー満載。運送会社、製氷屋、肉の解体業者、ビルの屋上にともうアクションシーンには最適過ぎる現場満載！

お決まりの看板からの落下もあり、最後には昼の間での大乱闘。ジャッキーとタランティーノが呑み屋で盛り上がった感じ…しかし長い。

倒しても倒しても復活する敵。キャラが濃いのにあっさりやられてしまう敵。アクション三昧の映画ですが、出だしは父親の幼少期からの拘りから入ります。

物には様々な過去が宿っている。傷がついた机を指で撫でながら、そんな語り口がゼンにも引き継がれた感覚として表されています。このあたりはアクションを売りにした映画とは違った一面でした。とにかく長い。長いんです。

エンドロールはアクション映画特有のNG・ハプニング集で、これ良し悪しだと思うのですが、急に現実に戻された感覚になります。私はあまり好きじゃないです。映画を観終わったあとエンドロールを眺めながらじんわり想いにふける、そんな時間を。

他に印象的だったのが『おと・な・り』という映画。

エンドロールが黒に文字のスクロールだけとシンプルなのですが、音だけで物語のその後を表現していました。なんだかわくわくした時間でした。

映画の世界とお別れする時間を音で過ごす。旅行に出かけて帰りの電車の中で思い出すような、そんな時間でした。

スタッフロールの中に知った文字が目

飛び込みました。録音スタッフに5月のハイロで上映した新作の音担当：AREA45のよご氏でした。ちょっとびっくり。

映画を観ることを改めて考えると、映画の世界からお別れする時間が印象に残りました。

食ってる物が違う

宮崎和海

最近映画をろくに見に行っていないし、家でも見てない....。

一番最後に見たのはテレビでやっていたチャーリーズエンジェル。

クソ眠かったがキャメロンディアス先輩がセクシー過ぎてなかなか寝かせてくれなかった。でも『今までに見た映画で心に残ったのはこれだ！』と名打たれたからには少し振り返ります。

それでも5/15から現在まで多分一本しか見ていない。今回のコーナーでも取り上げているジョナス・メカス監督の『ライフ・オブ・ウォーホル』。

ウォーホルとファクトリーのメンバーや彼の友人達をとらえたドキュメンタリーフィルムです。今回はインターネットで見たんですが、初めて見たのはアンディ・ウォーホル追悼の企画イベントで三年前くらいにアップリンクで見ました。その日はアンディー・ウォーホル自身の映像作品も多くやっていたんですが、軽快に飛ばすこの映画を見て僕は久しぶりにウキウキしたの覚ええています。

アンディー・ウォーホル自体を目的には無く、彼がプロデュースしたバン

ド、ヴェルヴェットアンダーグラウンドを目当てで見に行ったんですが、そんなことは忘れ、度肝を抜かれました。何て言うか僕の弟がよく海外サッカーを見て言う一言を使わせてもらおうと『食ってる物が違う』。

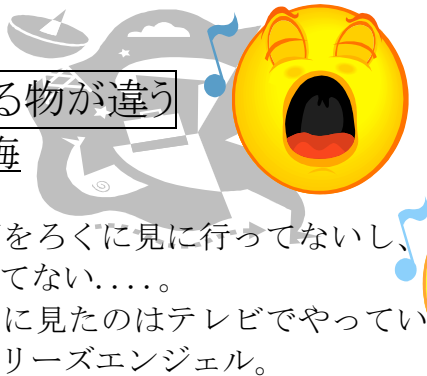
ドキュメンタリーと言う枠を超え、映像自体が踊って映像が生きていました。百人いたら百通りのやり方があるのは百も承知で言わせてもらおうと、ああも簡単に口笛吹きながら作れるのかと（作る過程はもちろん）。へんな力が入ってない。しかしながらどことなく漂う死のにおい（没後20年企画と言う事を差し引いて）。

その晩、家に着き、劇場でもらった不味いクラムチャウダー（アンディーが題材にした）を啜りながら凄いとは別の感覚を覚えたのを思い出します。たぶん弟が言う『食ってるもんが違う』だと思う。

もちろん人間が違えば一つとして同じ物は作れないし撮れないが、ジョナス・メカスさんが持っている感覚が信じられなかった。憧れにも出来ない感じです。

今回コーナーがリニューアルし、DIMENSION TRIP (dub) と題し、僕以外が作った既に完成している劇映画、映像作品等々を再撮影し新たに作品にする事になりました。今回はその一回に恐れ多くも『ライフ・オブ・ウォーホル』に挑戦します。

飲み込めないものを飲み込みます。出来ないなと思ったからやってみます。アピアが移転してハイロー回目。僕の腐りかけていた血が踊っています。



ハイロは居場所か

マエダシゲル

●レスラー（ダーレン・アロノフスキー）

スーパーでアルバイトしながらプロレスを続けている生活。過酷な試合の累積で、倒れ入院。心臓手術。ドクターストップがかかる。これを機に、娘と関係を修復したい、惚れてて相手もまんざらではなかろう、ストリッパー、マリサ・トメイと結婚したい。

人生もながくはない。自業自得と分かっているが、どれも上手くいかない。今の生活に耐えられない。リングに戻ろう。決める。我が身とだぶるが、何かが違う。

ハイロ。家族と仕事。映画をつくる。タクシー・ドライバーのトラビスが求めたのは居場所ではなかったか。大統領候補暗殺に失敗しジョディ・フォスター救出にその活路をもとめたが…。ラストをみるかぎり彼に居場所はなかった。居場所とはそれほど厳しい、思い通りに手に入る場ではない。だから、ミッキー・ロークがリングが居場所であったことが救いで涙を誘う。

上手くいかないからリングにもどっただけなら、それは逃げ場だ。思い通りにならない、しがらみの厳しさに逃げたのかも知れない。けど、彼には身にしみついた、いいファイトをしよう、みせよう、その気概、その積み重ね、その自信、ファンが認め、そしてここが自分の居場所だという覚悟があった。後ろ髪を引かれる重さを知って、ぎりぎりリング上でまだ後ろ髪を引かれながら、瞬間未練を断ち切った。ミッキ

ー・ロークのその立ち姿がいい。

覚悟とはそういう姿だ。その潔さがハッピーエンドに昇華され、その瞬間に、観てきたすべてが集約される。映画だなあと、たまらなくなる。

場があることと、そこが居場所になるということは違う。映画が好きで集まって、自分の映画を見せたい、いろんな人の映画を見たい。続ける中で、場があることに甘んじていないか。居場所にしたくても居場所にできない。でも居場所にしようという覚悟がなければ、なにも前には進まない。求めよ、さらば与えられんだ。

昔、お客さんに「俺はハイロの映画を見たいんだ」と捨て台詞をいわれた。ピンとこなかった。ほしのさん、鈴木さん、木村さん、角南くん、前田の映画はあっても、ハイロの映画というのが分からなかった。それは、ハイロを背負って映画を作っているのか、この場に責任もって映画を上映しているのか、ここはお前たちの居場所だろ、という意味だったのだろう。この映画をみるとプロレスへのまなざしが変わる。「今日は、いいファイトだった」と、お互いの仲間の試合つぷりをたたえあう。舞台裏。勝ち負けじゃないんだ。プロレスに人肌を感じる。生のプロレスが見たくなる。

ハイロのリングを観戦したい、ハイロのリングにあがりたい。そういう気持ちにさせるには、ミッキー・ロークになれ。

なれなくてもせめて自分の糧にしよう。心に残ったというのはそういうことだと思う。

瞬刊ハイロ 編集後記



6代目編集長 ほしのあきら

40年ぶりに友人と会いました。20歳の時に一緒に芝居をやった仲間、現役漫才師として活躍しています。懐かしい話をたくさんしたんですが全部断片で、時の流れが曖昧だったり、記憶が食い違ったり・・・会って思い出が蘇るのは素敵だけど、記憶は一人だけで持っていることが正しいのかな？（合わない方が良かった？）とも思っています。彼と別れたことがハイロを作るきっかけにもなっていて、ハイロ初期のことも記憶のためには誰かと共有しない方が美しくいいのだろうけど、これから40年やるのであれば、事實は現実化しておこうかと、そんなこんなで遺言シリーズをはじめました。

誌面を一新するつもりでイメージを育てて準備もしているのですが、なかなか『一新』になりません。ほんの形式のボキャブラリーの少なさにショックです。でも、いまに見てろ！いつかはへんなプログラムを完成させるぞ！

これまで作品と観客に対するハイロメンバーの意識を高めてもらうために、テーマを出して、文章を直してもらい続けました。初期の課題はクリアされ、しっかりしたものが見えて来たので、最後に楽に書ける（だろう）映画評を依頼しました。みんな自分の言葉で語ってくれて。読んでいて楽しかったのですが・・・ですが・・・ハイロで上映した作品を誰も書いてくれなかった！！！？せっかくわざわざ5月15日（前回のハイロ）以後に見た映画と絞ったのに、です・・・まあ、それが現実なんでしょうね。笑っちゃいます。私の誌面も残り少ないので、書ける範囲で！

『雫がおちて、そこは瓦礫になる』△。『contact c』○（木村作品で一番フィットした）、『肌色の花』×、『東京の青』◎（素朴で前向きで泣ける）、『探し物』△『後ろ影が聞こえる』◎（自分の映画だもん）、フィルムピクニック△、アイアム美奈子×××、ナキムッシ田中○（心の中が見えた気がする）、ハゼて室井○（体とカメラの一体感）、裸足のマヤ△、出張クラブ○（労働力に感激）、『ポートレート1〜3』×鈴木研究所◎（線香映画は曼荼羅です）、『ゴジラ対メカゴジラ』△、『美代子阿佐ヶ谷気分』○（久しぶりで骨のある若い映画）、『狼の紋章』△、『網走番外地・望郷篇』△。『男の紋章』×。『女は男のふるさとよ』◎（いや、戦後日本のふるさとです）、『グラン・トリノ』◎（言ってくれてる、やってくれてる）。『ハンドルネームはベンX』○（オタクSFはシュールだ）、『二二六事件・脱出』○（期待しなかった分ハラハラ）、『人生劇場・飛車角』△、『ココ・シャネル』○（シャネルってすごい人なんだ）、『激斗ひめゆり岬』×××、『いれずみ突撃隊』○（ふんどしで特攻、哀れ敵前自爆）、『エレファントラブ』×、『人生劇場・飛車角と吉良常』△、『妻の貌』○（小型映画の70歳の生き様）、『明治侠客伝・三代目襲名』△。

